

Library Navigator

立命館大学 図書館だより
ライブラリーナビゲーター

ISSN 1345-3343

Vol. 126

Fall/Winter 2020



図書館イメージキャラクター：よむりす

[特集] 副総長×図書館長対談 今ここで、できること コロナ禍で学ぶという挑戦

松原 洋子

立命館大学副総長 先端総合学術研究科教授

重森 臣広

立命館大学図書館長 政策科学部教授

[特集]

新型コロナウイルス 感染症と図書館の記録

[特集]

LS Events 2020



RITSUMEIKAN
UNIVERSITY

今ここで、できること コロナ禍で学ぶという挑戦

松原 洋子

立命館大学副総長 先端総合学術研究科教授

重森 臣広

立命館大学図書館長 政策科学部教授



重森 臣広

図書館長、政策科学部教授

1959年北海道生まれ。中央大学法学部、同大学院法学研究科で政治思想を専攻。1991年、熊本大学専任講師。1994年に政策科学部が設置されると同時に立命館大学へ赴任。趣味はドライブ（ほとんどが通勤）、音楽鑑賞（クラシックとジャズとピアノが好き）、読書（ほとんどが仕事）。

松原 洋子

立命館大学副総長、立命館大学大学院先端総合学術研究科教授

1958年東京都生まれ。東京大学大学院理学系研究科修士課程、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程後期課程を修了。2002年より立命館大学へ赴任し、産業社会学部教授、先端総合学術研究科教授として教鞭をとる。2019年1月より学校法人立命館副総長・立命館大学副学長。研究分野は科学史、生命倫理、科学技術社会論。趣味は街歩きとカフェでの読書。

2020年1月から世界規模で感染の広がりをみせている新型コロナウイルス。新興感染症が大学の学びにもたらすことは？ これまで感じなかったことへ目をむけたり、新しい研究の視点が芽生える可能性など、コロナ禍でも上を向いて挑戦し続ける学生のみなさんにむけて、松原副総長と重森図書館長が話します。

COVID-19 Pandemic を振り返る

新型コロナウイルス感染症の発生から緊急事態宣言の発出、2020年2月から振り返ってみると、日々目まぐるしく変わる状況だったとあらゆる人が感じていると思います。

重森 なにか感染症が流行っているとクルーズ船のニュースで聞いたときから、わたしの中では今回の一連の出来事はじまったと思っています。今から思えば、そのタイミングでの自分は、まだ深刻に受け止めていなかったと思いますね。

いよいよ深刻だと感じたのは、大学が2020年春 semester 授業を Web で行うこととなった時、大学が置かれる厳しい状況をひしひしと感じました。Web 授業というのは、多くの教員、学生にとって、経験がほぼなかったですから。教員として、これまで講義・演習で用いてきた教材がそのままでは通用しないことに加え、学生と対面で話せない、学生は質問もままならない、教員は答えをあげることできないという（物理的に断絶された）状況の中で何ができるのか、ということを経験した先生方は苦労されたと思います。

松原 武漢の病院が医療崩壊し、同様の事態が中国国内に留まらずニューヨークやミラノなど他大陸の大都市にも広がっている光景を目にしたとき、まるで現実とは思えないことが実際に起きてしまったと思いました。こういった事態と自分の状況をとっさに結び付けられず、パラレルワールドに移されたと思うほどでした。世界中で外出自粛となり、街から人が消えた時、ポール・デルヴォーというベルギーの画家の（静寂な街のなかただ一人女性が佇む光景をシュールレアリズムで表現された）絵を思い出しました。「これは現実だけど、現実を超えているな」と改めて思いました。

それと同時に、理事のひとりとして、立命館大学を含む学校法人立命館の運営をどうするかを早急に考え、まとめなくてはいけません。4月7日に国から緊急事態宣言が出されたことを受け、翌日から大学キャンパスを入構禁止、附属校を臨時休校としました。

コロナ禍であっても、 図書館はオンラインで開館

緊急事態宣言下、本学図書館についてはどうでしたでしょうか？

重森 図書館利用に関していえば、わたしが学生時代のころと異なる印象を持ちました。私が学生の時は、閲覧室や書架で書籍を中心とした紙に印刷されたものを利用することが主流でしたが、図書館に入館できなくなると、図書館の機能は完全に止まってしまいました。そのころと比べると今の大学図書館は、オンラインで閲覧できるデータベースや電子書籍があるので、今回のコロナ禍で図書館機能をどこまで維持したり開いたりできるだろうかということを経験して考えていました。

松原 副総長の担当職務のひとつに、図書館の利用や充実を進めていくことがあります。リアルな図書館に入れたい、リアルな本は使

えないといった今回のような時こそ、オンラインでのサービスを最大限に展開したいと思いました。たとえば「レファレンス・サービス」(わからないことがあったら図書館司書に質問すること)を、このコロナ禍ではZoomでもできるようにしました。学修と研究を進める上でレファレンスはキーとなるものだと思いますが、大学の新生入生は、このサービスをあまり知らないと思いますので、大学の図書館をどう使ってよいかわからない、うまくこのサービスが伝わるだろうか、と心配していました。

「学びのスタイル」を模索する 時期ではないでしょうか

これから大学の学修環境や学習方法、研究活動はどのように変化していくのか、社会の中で、大学の存在そのものがどういう位置づけになっていくと思われませんか？

重森 講義科目といわれる、これまで大教室で教員が教卓に立ちレクチャーする知識伝授型の授業は、オンデマンドの形態でも可能になるのではないかと実感も持っています。(たとえば反転授業のように)今後、学生が集い実際の教室で行う授業は、従来までとはなにか違うことを模索する可能性がいよいよ出てきたのではないかと思います。「オンラインのほうが」効果的な教育ができる、そういう授業形態も可能性としてありうると思います。

一方、演習科目のような議論したり質問したり、対面のコミュニケーションが重要となる、自ら知を創り出していくような授業がありますが、オンラインの様々なツールを使えばできなくはないですが、もどかしいところもたくさんあります。with コロナの状況で、何がどこまで許容されるのかなど教育的な部分に関わってきますが、これからは私たち教員は模索し続けたいといけなく思っています。大学院生に1対1で論文指導するのは、実はオンラインのほうがみっちりできるという面もあります。

「オフキャンパス」の学びについてですが、国内外問わず社会の実過程の中に入りこんで、問題発見したり、課題解決のための知見を獲たりといった学修スタイルがありますが、こういった実践をソーシャルディスタンスの中でどう対応していくべきか、今のところまだ模索しているのではないのでしょうか。学生を、地方自治体などの実際の現場に連れていくという授業にも超えるべきハードルがあると思っています。

例えば、私自身の専門分野は歴史思想史なので、Google Project はじめ著作権がきれたものはどんどんオンライン化されているのでオンラインでも研究は継続できています。しかし、フィールドを伴う研究分野は、この状況がいつまで続くのかという懸念がかなり強いのではないかと感じています。

「不要不急」でわたしたちの生活の充実 は成り立っているからこそ、 「リアル」は大切です。

松原 今回のコロナで人と触れ合う、それから現場に出かけていく、そういったことがままならなくなって、改めてその価値を認識したのではないのでしょうか。よく、不要不急の外出は控えるようにといわれましたが、我々の生活の大部分は「不要不急」で成り立っていたことを実感しました。



コロナ以前から、DX（デジタルトランスフォーメーション）といわれるようにバーチャルな世界の拡張が著しく、重森先生が先ほどおっしゃたように、様々な資料、絵画、文化資源などが世界のどこからでも、いつでも目にすることができる時代になってきています。例えば「あつまれ動物の森」というゲームを使ってアメリカでは卒業式を行ったと聞きました。アバターでの交流をはじめとし、年齢やジェンダーや国・地域を超えて交流するということがいろいろなスタイルで今後進むでしょう。「アバター大学」というものも将来的にはあり得るかもしれません。しかし、大学そのものが将来的に全てオンライン（バーチャル空間）にシフトするかというと、「不要不急」で生活の充実が成り立っているという観点から考えれば、リアルな場がどれほど大切かは言うまでもありませんね。

図書館の役割＝空間の感化力

大学図書館はどうでしょうか？

松原 図書館は情報を得る手段の一つですが、私たちが肉体を通して知覚し、思考し、伝達（アウトプット）するという一連の流れにおいて、この空間は非常に大切な役割を果たしているといえます。空間の感化力が図書館にはあるのではないのでしょうか。

オンラインで得られるデータベースを充実させていくことを、立命館大学図書館は意識的に進めてきています。今回入構禁止になっても、オンラインのデータがあるのでなんとか利用者と図書館を繋ぐことができました。けれども、「モノ」が持つ感化力、空間の感化力というのは、情報をオンラインでスピーディーに得られることとは、

容易には置き換えられないのではないのでしょうか。

私たちは、今回のコロナで、一時来館を禁じられましたが、その時間の中で改めて、空間に身を置くことの大切さを再確認できましたね。

「巨人の肩の上に立つ」という言葉を体現してください

「空間の感化力」について。松原先生の場合、図書館からどういう力を与えられるとお考えでしょうか？

松原 たとえば図書館での勉強は集中しやすい、研究室や自宅では揃えられない膨大な資料を一度に並べて読むことができる、というメリットもあるでしょうが、私は図書館の「余白の部分」が大事だと感じています。かつて、ある先生が「図書館に来て本の背文字を見るだけでかしくなる」とおっしゃいました。「読書」とは、文化の総体に触れることなのです。

「巨人の肩の上に立つ standing on the shoulders of giants」という言葉をご存じでしょうか。Google Scholarの検索画面にも書かれていたフレーズです。ヨーロッパの古くからのことわざで、私が今これを考え、読めて、知ることができるのは、それより前に蓄積された学問や文化や知識の総体の上に立っているから、という意味です。私の研究に対するリスペクトの原点は、この言葉に凝縮されています。

今後大学における図書館の位置、役割およびサービスなどはどのように

変わっていくか、あるいは変えていければよいと考えますか？

重森 大学図書館の役割は、学修用、研究用、そして貴重書や文化的コレクションをアーカイブすること、これら3つを担うということは変わらないです。withコロナというのであれば、時間や物理的な制約なしに利用できる方向で整備していくことがより大切になっていくと考えます。労力も時間もお金もかかりますが、物理的図書館がたとえ臨時的に休館となったとしても、オンラインで開館しているといえるほどの準備を整える必要がありますね。

松原 今回のコロナ禍では、世界が同時に答えのない実験に放り込まれるということがある、ということの世界中の人が思い知らされていると思います。そして今もまだその実験中といえます。

特に若い皆さんは受験勉強の中で、用意された答えにいち早く、効率よくたどり着くことに慣れてこられたと思いますが、このコロナに関しては、「正解」がそう容易く出るものではありません。

今、最先端の科学の中にあっても、コロナのパンデミックをきっかけに、14世紀のペスト（670年前）、100年前のスペイン風邪の歴史が注目されました。コロナのインパクトを深く理解するには、効率的に目先の情報にアクセスし即座にアクションを決めていくのではなく、時間的、空間的に研ぎ澄まされてきた情報に近づく必要があります。

大学図書館には、時間と空間を超えて、研究という世界、また幅広い社会で吟味されてきた成果が、膨大かつ多様に用意されています。大学ならではの吟味や目利き、辛抱強い長年の研究活動、その中で選び抜かれたものがオンラインデータベースや蔵書として提供されています。

このコロナ禍では、大学教育の形式（バーチャルか対面か）を見直すきっかけとなった側面も大いにありますが、我々が大学図書館という専門性に依拠した「装置」の真価を再評価する機会ともなったのではないのでしょうか。

入学時の価値観と卒業時の価値観が大きく変わる＝大学で学ぶ意義

新型コロナウイルスの影響は当面続きます。学生自身が描く大学生活と現実の間にギャップが生じている学生に対して、学生生活を少しでも豊かにするための大学図書館の活用方法について、アドバイスをお願いします。

重森 留学をしたいと準備してきた学生たち、フィールドに出て人と会って現場を見て研究したい学生も多いと思います。それらがままならない状況下で、悔しさは計り知れないと思います。世界中のありとあらゆる人が挫折したり、なにかをあきらめなければいけなかったりと、世界が同時に同じ状況に陥っていることに、目を向けてほしいと思います。

よく、大学に入学してどういう意義があるのかといった問いかけがありますが、私は、入学時の価値観と卒業時の価値観が大きく変わっているということが、大学で学ぶ意義ではないかと考えます。所属する学部や専門分野がどこであれ、今回のコロナを、自分の成長、すなわち、価値観の転換にどう結び付けられるのかという観点で、今一度ニュースを見、新聞を読み、図書も読み、自身の関心や興味を広げていくチャンスと捉えていただければ、みなさんの人生において、意味のある時期になると思います。

図書館は、みなさんの挑戦を最大限サポートするところです

松原 学部生のみなさんにとっては今回のような思わぬ事態との遭遇は、想像を超えるインパクトなのであろうと思います。中世のペストや100年前のスペイン風邪並みの世界史的な事件に私たちは今立ち会っています。何十年後かに、だれかから証言を求められるような稀有な出来事に遭遇しているのです。

新興感染症は、これからも頻繁に出現するだろうと言われています。また近年では、ヨーロッパでの干ばつ、アメリカでの山火事、日本でも猛暑や豪雨など、激烈な気候変動に世界が悩まされています。

人類はたびたび危機に遭遇してきたのですが、これからは少し違った次元での経験を地球に住む者として余儀なくされるかもしれません。悲観的な言い方かもしれませんが、そういった中で人間は生きていくのでしょうか。私たちが知らないだけで、実は想像を絶するような苦難を生き抜いた人たちがこれまでもいて、そういった人たちの経験に学んでいくということも増えるのではないのでしょうか。

「そんなことには出会いたくなかった。もっと平穏な時に大学生でありたかったよ」とほとんどの人が思うでしょうが、大学時代というのは、長い人生の中でみとときには、自由に伸びしろを広げられる時間でもあるはずです。大人たちがコロナの対策で右往左往している今こそ、若者にとってはチャンスです。「正解」がない中「こうしとけ、ああしとけ」と言われることに対して「それは本当に正しいのでしょうか」と言いやすいタイミングだと思います。「正解があるはず」、「こういうことがいいに決まってる」と決めつけずに、チャレンジしてほしいと思います。

図書館はみなさんのチャレンジそのものの「答え」はもっていません。みなさんそれぞれが「挑戦」に向かう時に、灯台になり、追い風になり、目の前に魚をばとんと落とすカモメになって、大海原にでていくみなさんのサポートをする役割を図書館は果たします。

図書館としては、みなさんの探求をサポートするために、サービスをどう展開していけばよいかについて、リアルもバーチャルも追求していきたいと思います。

[特集]

新型コロナウイルス 感染症と図書館の記録



新型コロナウイルス感染症拡大予防の対策を講じながら、サービスを続けてきた2020年度春学期。学修と研究を止めない図書館サービス（サービスのオンライン化）など、図書館の対応を記録しました。

※「本学の対応」については学園ホームページ、「社会の動き」についてはNHKのニュースサイトを参考にしました。

2020.3.9～4.7

図書館の対応（通常開館中での利用制限）

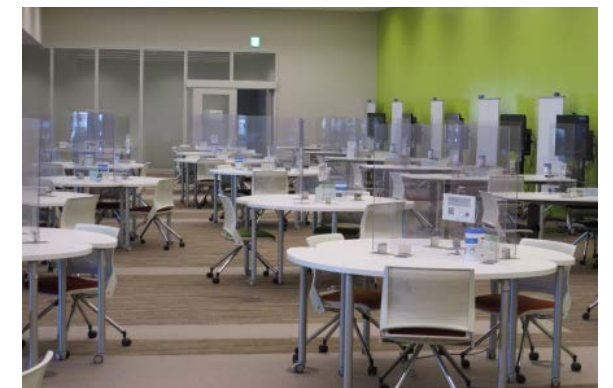
- 3月9日 ■一般市民の図書館利用と中高生対象の図書館公開（オープンライブラリー）を停止。
- 3月14日 ■びあら（ラーニング・commons）・プレゼンテーションルーム・セミナールーム・グループ学習室・電卓室・シアタールーム・個人研究ブースの利用を停止。
- 3月中～下旬 ■サービスカウンター、利用者との接触時間を減らすため内線電話を設置。閲覧座席使用時のルールを広報。
■感染症拡大防止のための啓発ポスターを館内に設置、オンラインで利用できる電子ブック・データベースの広報を開始。電子書籍試読サービス（Maruzen eBook Library）の導入。
- 4月1日 ■MyLibrary（図書館ホームページ）からの貸出延長可能を広報。自動貸出返却機での返却を延滞時にも可能に。
■ライブラリーカードの発行、メールでの申請も可能に。
- 4月6日 ■レファレンスサービスを遠隔レファレンスに切替。

本学の対応

- 2月27日 2020年3月卒業式、2020年4月入学式の中止を発表。
- 3月2日 新型コロナウイルス感染症対策のための法人危機対策本部の設置。
- 3月12日 「学園関係者に新型コロナウイルス感染者が発生したときの初期対応に関するお知らせ」発表。
- 4月1日 春学期開始。
- 4月6日 4月8日～5月6日の間、学生等の入構禁止措置、教職員の原則在宅勤務または自宅待機を決定。

社会の動き

- 1月14日 WHO：新型コロナウイルスを確認。
- 1月16日 国内で初めて感染確認。
- 2月3日 ダイヤモンド・プリンセス号横浜港へ入港。
- 3月2日 首相、全国の小中高校に臨時休校を要請。
- 3月24日 東京オリンピック・パラリンピック延期を決定。
- 4月7日 7都府県に「緊急事態宣言」発出。



2020.4.8～5.31

図書館の対応（臨時休館）

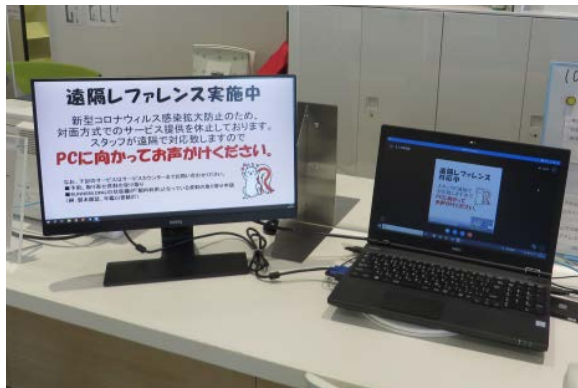
4月上旬	■ 電子書籍試読サービス（KinoDen）の導入。
4月8日	■ 政府の緊急事態宣言発出を受け、臨時休館。 ■ 4/8～4/22対面サービスを停止。
4月15日	■ 「「緊急事態宣言」に伴う、キャンパス入構禁止期間中の利用者サービスについて」を発信（①一般問い合わせ、②Webレファレンス、③電子書籍サービス、④ライブラリーガイド、⑤ライブラリーナビゲータ、⑥RAILチャットボット、⑦学習図書館ツアー動画）を図書館ホームページとmanaba+Rで紹介。
4月中旬～	■ シラバス指定図書のうち電子書籍で購入可能なタイトル、その他学習に役立つ電子書籍を順次購入（前期中で計約800タイトル）。
4月23日	■ 春学期中に学位論文を提出予定の大学院生に図書の郵送貸出（返却）サービスを実施。
4月28日	■ 春学期中に卒業論文提出予定の学部学生に図書の郵送貸出（返却）サービスを実施。
5月7日	■ オンライン授業開始に合わせて、オンデマンドによる「図書館ガイダンス」配信開始。
5月11日	■ 事前予約による図書資料の郵送サービスの対象者拡大（全学部生・大学院生）と資料取り置きサービスを開始。 ■ 資料取り置きサービスの利用に限り図書館の入館を許可（対象：教員・学部生・大学院生・研究系職員）。
5月14日	■ 電子書籍にアクセスできるMaruzen eBook Libraryの試読サービスについてサービス期間を延長を決定。

本学の対応

4月27日	「新型コロナウイルス感染拡大に対する行動指針（BCP）」（5月7日発効）および「5月7日以降の対応について」を発表。
5月7日	BCPレベル4（原則キャンパス入構禁止、WEB・オンライン授業の実施）を発表。

社会の動き

4月16日	「緊急事態宣言」全国に拡大し、13都道府県は「特定警戒都道府県」に。
5月4日	「緊急事態宣言」5月31日まで延長。
5月14日	「緊急事態宣言」39県で解除。8都道府県は継続。
5月21日	「緊急事態宣言」関西は解除される。
5月25日	全国すべての地域において「緊急事態宣言」が解除される。



2020.6.1～10.28

再開館（6月1日）後の対応

6月1日	■ 着席可能な座席数を半減、ソーシャルディスタンスを保つための各種注意書きの掲出、入口にアルコール消毒液デイスペンサー設置、図書資料、カウンターの定期的消毒（BV4、次亜塩素酸ナトリウム溶液）、ビニールカーテンの設置など、感染拡大防止のための環境を整備の上、利用者サービスを実施。 ■ 事前予約による書架利用のための開館開始（開館時間：平日10:00-17:00、土日祝休）。 ■ 入館者数は最大で座席数の2割以下を目安とし、利用時間は1時間以内に制限。 ■ 立命館アジア太平洋大学との図書館間相互利用サービスの再開。
6月22日	■ 事前予約による書架・閲覧席利用のための開館実施（開館時間：平日10:00-17:00、土日祝休）。 ■ 入館者数は最大で座席数の3割以下を目安とし利用時間は2時間以内に拡大。 ■ カウンターにおけるリモート（遠隔）レファレンスサービスを開始。 ■ WEB授業における図書館ガイダンスの実施。 ■ 貸出用PC対応を開始（平井嘉一郎記念図書館）。 ■ e-DDSサービス、貴重書閲覧利用を再開。 ■ イベントは小規模で短時間のものは開催可能とした。
7月6日	■ 学外ILLサービス（紹介状利用を除く）、NDLデジタル化資料送信サービス、マイクロ資料利用を再開。
9月26日	■ 秋学期開始。 ■ 入館者数の制限は座席数の3割以下を継続。 ■ 衣笠・BKC図書館の入館ゲート付近にサーマルカメラを設置（OICはキャンパス入口に設置）。 ■ 閲覧席にパネル衝立を設置。 ■ びあら、セミナールーム等の座席数の配置を変更、利用者の記録がとれるようQRコードをテーブルに貼付。 ■ 共用部分に除菌ウェットタオル、アルコール消毒液を追加設置。 ■ 利用時間の拡大（平日8:30-22:00（BKCは21:00）、土日10:00-17:00）。 ■ 利用停止としていた施設（びあら、セミナールーム等）の利用再開。
10月19日	■ BKC図書館の開館時間を平日8:30～22:00に拡大。
10月28日	■ 入館者数の制限を座席数の6割以下に緩和。

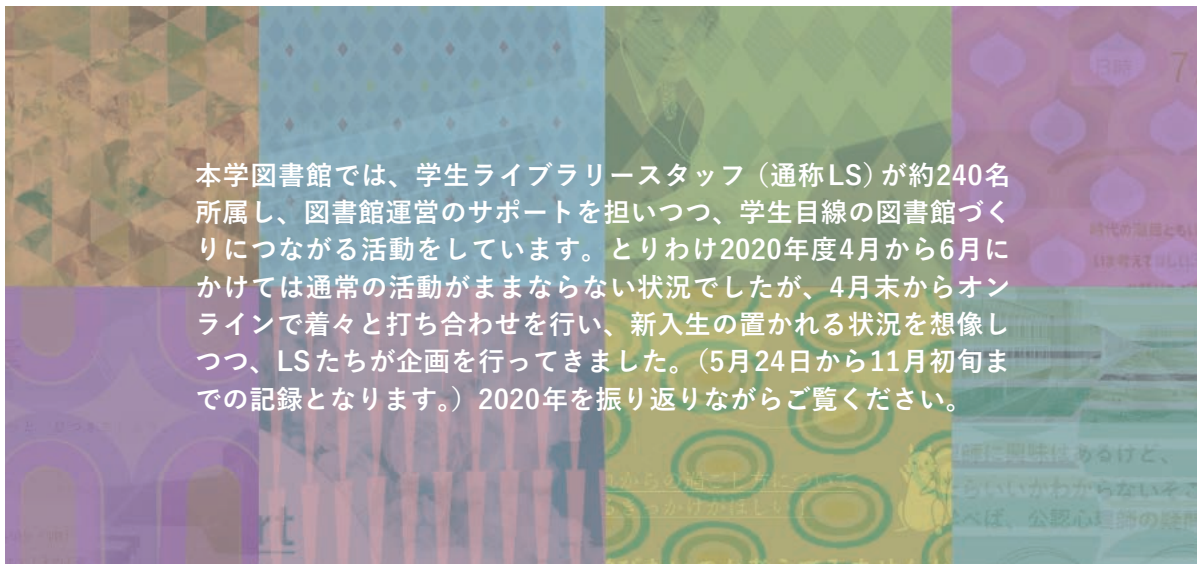
本学の対応

6月1日	「立命館大学における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」。BCPレベル3（3密の徹底回避、キャンパス滞留学生数2割程度以下、オンライン授業継続）。
6月22日	BCPレベル2（キャンパス入構可、キャンパス滞留学生数4割程度以下）。
9月16日	「新型コロナウイルス感染症に対する立命館大学の行動指針（BCP）の見直しについて」、「立命館大学における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン（第2版）」、「新しいキャンパスライフをはじめよう！（新型コロナウイルス感染拡大予防マニュアル第2版）」、「立命館大学における「マスク着用」に関する申し合わせ」を発表。
9月26日	秋学期開始。対面授業とWEB授業を組み合わせ実施。
10月5日	「学園関係者に新型コロナウイルス感染者が発生した場合の対応ガイドライン（第2版）」発表。

社会の動き

6月2日	東京都：初の東京アラートを発動。発動中は休業要請緩和せず。
6月5日	文部科学省：「大学等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドラインについて」。
6月19日	都道府県をまたぐ移動の自粛要請、全国で緩和。接待を伴う飲食業などの業種の休業要請を撤廃。プロ野球の無観客試合開始。イベントの一定の収容率での開催が可能に。
7月22日	「Go Toトラベル」キャンペーン始まる。
7月28日	国内の死者1,000人を超える（クルーズ船除く）。
8月28日	政府が新型コロナ対策の新たな方針を発表。

LS Events 2020



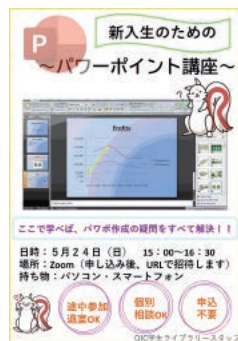
本学図書館では、学生ライブラリースタッフ（通称LS）が約240名所属し、図書館運営のサポートを担いつつ、学生目線の図書館づくりにつながる活動をしています。とりわけ2020年度4月から6月にかけては通常の活動がままならない状況でしたが、4月末からオンラインで着々と打ち合わせを行い、新入生の置かれる状況を想像しつつ、LSたちが企画を行ってきました。（5月24日から11月初旬までの記録となります。）2020年を振り返りながらご覧ください。

新入生歓迎企画 LSによるパワーポイント講座

2020年5月24日

場所：オンライン 参加：40人

2020年度新入生を迎えるにあわせて、OIC学生ライブラリースタッフ（以降LS）が、新企画として計画していました。4月に緊急事態宣言が発出され大学の授業がいったん止まる中、新入生の学習に役立てられる企画なのでこんな時こそ実現したいというLSの思いで、5月の授業再開に合わせてオンラインで開催しました。OICに留まらず、他のキャンパスからも参加がありました。

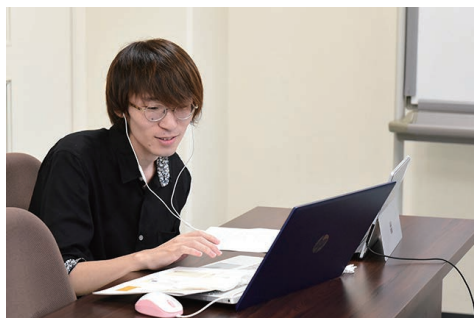


図書館活用術を教えます！ ～Zoom図書館開館～

2020年7月7日

場所：オンライン 参加：21人

多くの時間を自宅で過ごしている今だからこそ図書館をうまく活用して読書の楽しみを知ってもらうためのオンライン企画。図書館利用方法（事前予約制、図書郵送サービス、データベース活用等の紹介）と、LS1人が1冊ずつおすすめ本の紹介を行いました。



ストレスマネジメント講座

2020年7月8日、9日

場所：オンライン 参加：15人

普段以上に溜まるコロナ禍のさまざまなストレスと向き合い、うまく対処していく講座を2回連続で開催しました。第1回テーマ『あなたのストレスはどのタイプ？』、第2回テーマ『“リフレーミング” ストレスを軽減する方法を学ぶ』、それぞれの企画参加を通して、参加学生はストレスに関するアセスメントや対処法を学び、見方や捉え方を変えることでそのストレスを減らす方法を学びました。



新入生歓迎！ 平井嘉一郎記念図書館に潜入！ 学生スタッフによるオンラインツアー

2020年7月28日、30日

場所：オンライン 参加：25人

オンライン授業で実施できていなかった平井嘉一郎記念図書館ツアーを充実させる形で、LSが、同館をオンライン（Zoom）・ライブ形式で学べる企画として実施しました。企画では同館の利用方法等の解説に加え参加型クイズも実施しました。



ぴあら講演会 on Zoom 「withコロナの時代に、 学生生活をどう生きるか」

2020年7月25日

場所：オンライン 参加：52人

コロナ禍で人と出会う機会が得られず、学びのモチベーションがなかなか強くもてない在学生を対象に、この情勢下をどのように生きていくのか、主体的に生きている卒業生と接点をもつことで、学生生活の展望を前向きにとらえられる機会をもちました。

この状況でリアルに学ぶ機会を逸する中、中米（コスタリカ）で働くOBとオンラインで交流することで、興味や関心、世界観を押し広げる機会となりました。



総合心理学部×LS 公認心理師に関する勉強会

2020年9月24日

場所：オンライン 参加：40人

OICのLSが主催で総合心理学部とコラボレーションし総合心理学部生（主に1年生）の学びをサポートする企画を開催しました。

参加者に公認心理師資格の理解を深めてもらいつつ、公認心理師関連の図書館資料をLSが紹介することで、学習のための図書館利用方法をアドバイスしました。総合心理学部の森岡教授から公認心理師についての説明、学部事務室からの履修についての解説、LSによる学習の動機付けとなるクイズや書籍紹介などを経て、最後交流の場を設けました。



Let's start 公認会計士

2020年10月8日

場所：オンライン 参加：7人

公認会計士を目指すLSが、会計士試験の勉強に取り組む学生目線で、勉強のコツ、会計士の勉強の中で不安に感じることをなどを等身大で語り、交流の場で不安に思うことや漠然とした疑問などを解消してもらおうピアサポートの企画として開催しました。

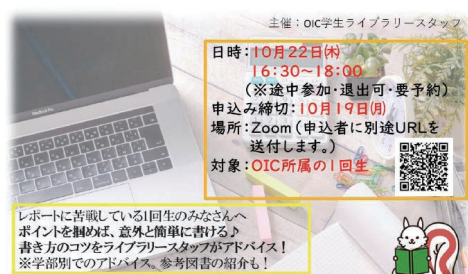


1からわかるレポート講座

2020年10月22日

場所：オンライン 参加：11人

春学期のオンライン授業の中で、レポートの書き方に戸惑った、書き方のコツを知りたい新入生を対象に、OICの学生ライブラリースタッフ主催で、開催しました。レポートに関する図書を多く有するOICライブラリーの紹介、学部ごとになされてより詳しく書き方のコツの解説を行いました。学部別の分科会では、SSPピアサポーターも参加し、図書館とSSPが連携して新入生をサポートしました。



ぴあら講演会 「withコロナの時代に、 学生生活をどう生きるか」

2020年10月24日

場所：オンライン 参加：30人

コロナ禍で人と出会う機会が得られず、学びのモチベーションがなかなか強くもない在学生を対象に、この情勢下をどのように生きていくのか、主体的に生きている卒業生と接点をもつことで、学生生活の展望を前向きにとらえられる機会をもちました。

この状況でリアルに学ぶ機会を逸する中、なかなか出会えない場所（シンガポール）で働くOBとオンラインで交流することで、興味や関心、世界観を押し広げる機会となりました。



青空読書

2020年11月4～6日

場所：OICライブラリー 参加：39人

2018からはじめた、OICライブラリーの屋上を開放し、青空のもと読書を楽しむ企画。2020はコロナ禍の影響で11月に実施。在学生のみならずライブラリーに足を運び、それぞれ読書を楽しんでいました。

